

ひらま よういち

1933年横須賀市生まれ。1957年防衛大学校卒(1期)。海上自衛官(海将補)を経て、防衛大学校講師、同教授、同図書館長、筑波大学講師・常盤大学講師などを歴任。法学博士。現在、軍事史学会理事、太平洋学会理事、戦略研究学会理事、岡崎研究所理事などを務める。主な著書に、『第一次世界大戦と日本海軍』(学位論文、慶應義塾大学出版会)、『日英同盟』(PHP新書)、『日英交流史 軍事3』(編著、東京大学出版会)、『戦艦大和』(編著、講談社)、『日露戦争が変えた世界史』(芙蓉書房出版)、『千九百四、五年露日海戦史』(解題、芙蓉書房出版)など多数。

オピニオン 60

日露戦争100年の今こそ 地球儀的視点から歴史の再認識を

Message from Opinion Leaders

歴史学者・法学博士

平間 洋一氏

アジアの小国日本が大国ロシアを敗った日露戦争から100年。その意義を今こそ正しく見つめ直そうと訴えるのは、歴史学者の平間洋一氏。“地球儀的”視点から、日露戦争を世界史100年の流れの中に位置づける氏の研究は、ユニークにして示唆に富む。多くの事実裏付けられた歴史の真相に、虚心に耳を傾けたい。

**有色人種が白色人種に勝利した
それが日露戦争の世界史的意義**

一日露戦争の意義の見直しを訴えておいてですが、従来の考え方のどこに異を唱えていらっしゃるのでしょうか。

日露戦争は1904(明治37)年に始まり、翌1905(明治38)年9月のポーツマス条約で終結しました。今からちょうど100年前の戦争です。

多くの日本人にとっては、「学校の教科書で習った」という程度の認識にすぎないかもしれません。しかし、100年のスパンで地球儀的にこれを見ると、日露戦争はそれ以後の世界史の流れを大きく変えたといえるほどの影響力をもっていました。決して単なる「歴史上の一件」ではありません。

例えば、現在イラクのサマワに派遣されている自衛隊を、イラクの人たちは親しみをもって受け入れています。その国民感情の背景には、100年前の日露戦争における日本の勝利の影響がある。また、前国連事務総長のガリ氏は、来日の度に東郷神社を訪れ、参拝は計5回を数えました。東郷神社とは、日露戦争の日本海海戦でバルチック艦隊を敗った連合艦隊の司令長官東郷平八郎を祭る神社。現事務総長のアナン氏も来日の際に参拝を希望したと聞いています。

こうした事実はあまり知られていませんが、日本人が自国の歴史について正しい認識を持ち、国のあり方を考える際に、日露戦争は極めて重要なポイントになります。世界史的に見た日露戦争の最も大きな意義は、「有色人種の非キリスト教徒が、白色人種のキリスト教徒に勝利した」という点にあるのです。

その点を詳しくお話する前に、日露

戦争について教科書的なおさらいをしておきましょう。

19世紀後半、産業革命をはじめとする科学技術の発達によって商品の大量生産が行われるようになりました。それに伴い、生産に必要な資源と、商品売りさばくための新たな市場を求めて、列強がアジアなどに競って進出し植民地を作った。いわゆる帝国主義の時代です。

明治日本も遅れてその流れに乗り、朝鮮半島や中国大陆への進出を図る。その過程で北からやって来たロシアと衝突したのが日露戦争であり、その勝利によって第2次世界大戦に至る日本の軍国化が加速した——というのが、一般的な理解ではないかと思えます。

しかしこれは、事実としても解釈としてもあまりに一面的であると言わざるを得ません。

そもそも、日露戦争は日本が侵略的意図から起こしたものではありませんでした。ロシアは極東での優位を確立するために、かねてから対日戦争を計画し、軍備増強を図っていました。1903年に書かれたロシア海軍の文書には「日本を撃破するだけでは不十分であり、これを殲滅(皆殺し)しなければならない」とも書かれています。

勝機のあるときに戦わなければ国が滅ぼされる。そうした状況が日本に開戦を決断させたのです。当時の日本の国力では市場を求めて満州に進出することなど考えられない。勝ってから欲が出たという面は確かにありますが。



**歴史の正しい理解のためには
当時の価値観で見る必要がある**

一日露戦争は誤解されているわけですね。

歴史を正しく理解するには、当時の状況、当時の価値観で見る必要があります。現在の価値観で歴史を評価するなら、ナポレオンはヨーロッパ最大の戦争犯罪人ということになってしまうでしょう。

では、当時の価値観とはどのようなものだったか。ダーウィンの進化論が国家にも適用できるとされ、強い国家が他を支配し、文明国が野蛮人を支配するのが正しいことだとされていたのです。野蛮人相手の戦争は“いい戦争”だ、と。

英米では日露戦争を、専制政治の非文明国ロシアに対する、立憲政治の文明国日本の戦いであると評価し、日本を支持していました。例えば、ニューヨー

ク・タイムズ』紙は「日本の勝利は『文明の凱旋』であり……人類の自由進歩の最大障害物を崩壊し取り除いた」と賞賛しました。

しかし一方で、同じく進化論的な考え方から、有色人種が白色人種より劣っているとされ、差別を受けている時代でもありました。

極端な例ですが、オーストラリアの先住民の「アボリジニ」といわれる人々は、入植したイギリス人から“狩り”の感覚で殺害されていたといえます。オーストラリアでは1976年までアボリジニは人口調査の対象にもなっていませんでした。カリブ海の国々は黒人の国というイメージがありますが、それは、もともと住んでいたインディオを皆殺しにしたあとへ黒人奴隷を運んできたからです。

中国人も多く奴隷的労働力としてアメリカへ運ばれました。アメリカの大陸横断鉄道を作ったのは彼ら中国人でした。アメリカ人の船長が中国人のボーイをなぐり殺し、遺族に20ドル支払ったところ、それを聞いた現地のアメリカ領事が「たかが中国人に20ドルは高い」と言ったこともあったそうです。

こうした、白色人種による有色人種差別が、正しいこととして公然と行われていた。それが19世紀の世界でした。

日露戦争は、そうした状況の中で、有色人種の日本人が白色人種のロシア人に対して挑みかかったものでした。事実、当時のロシア皇帝ニコライ2世は、公文書で日本人を「小猿」と呼ぶほど蔑視していました。人種的優越感から、「あの小猿が戦争をしかけてきても、簡単に勝てる」と思いこんでいたのです。

しかし結果はご存じのとおり日本の勝利に終わりました。「有色人種が白色人種を敗った」ことは、世界の人々に大き

な衝撃とともに受け止められたのです。

日本の勝利が世界中の有色人種の民族独立意識に火をつけた

—具体的に、日本の勝利は世界にどんな影響を与えたのでしょうか。

日露戦争における日本の歴史的勝利は、アジアやアラブなどの有色人種による、民族国家独立と人種平等を求める運動を引き起こしました。

少し長くなりますが、アジアの指導者たちが日本の勝利をどのようにとらえたか、いくつかご紹介します。

現在、台湾の中華民国からも大陸の中華人民共和国からも「建国の父」と仰がれている孫文。彼は、日露戦争での日本の勝利で覚醒し日本に留学してきた若者たちを率い、日本を基地として、中国最初の近代国家・中華民国の建国を果たしました。その孫文は日露戦争についてこう述べています。

「これはアジア人の欧州人に対する最初の勝利であった。この日本の勝利は全アジアに影響を及ぼし、全アジア民族は非常に歓喜し、極めて大きな希望を抱くに至った」

長くイギリスの植民地だったインドの

独立運動を指導し、独立後に初代首相となったネルーも、日本の勝利に影響を受けた1人でした。そして、「ヨーロッパの一大強国が敗れた。とすればアジアは、昔たびたびそういうことがあったように、今でもヨーロッパを打ち破ることができるはずだ。日本の勝利は、アジアにとって偉大な救いであった」と、のちに書いています。

同様の影響を受けた人々は、ベトナムやビルマなど他のアジア諸国にも多く存在し、それぞれの民族自立に大きな役割を果たしました。影響はさらに遠くアラブ諸国にまで及び、エジプトやイラン・トルコなどの民族自立を引き起こしました。日本にイスラム教を広げて天皇をカリフ（イスラム最高指導者）とすることにより、日本をイスラム世界のリーダーとしてイスラム世界の求心力を回復し、キリスト教文明に対抗しようという動きさえ生まれたのです。

もう1つ忘れてならないのは、アメリカの黒人に与えた影響でしょう。日本軍の規律や勇気、指導者のリーダーシップなどは武士の伝統であり、この指導力を黒人も学ぶべきである、と黒人指導者たちは主張しました。黒人として初めて博士号を取得し、黒人の人権確立運動の先



「歴史は英語で発信しなければ世界の歴史とならない」と強調する氏は、ホームページでも自らの歴史観・歴史研究を英語で世に問うている。
<http://www.bea.hi-ho.ne.jp/hirama/>

頭に立ったウィリアム・デュボイスは、「有色人種が先天的に劣っているという誤解を日本が打破してくれた。日本が有色人種を白色人種の奴隷から救ってくれるので、日本を指導者として有色人種は従い、われわれの夢を実現しなければならぬ」と訴えました。のちに活動範囲をアフリカにも広げ、「アフリカ解放の父」と呼ばれるまでになったデュボイスに決定的な影響を与えたのが、日露戦争の衝撃だったのです。

このように、世界中の有色人種に勇気と希望を与えた日露戦争の勝利ではありましたが、これは逆に白色人種に日本への警戒心を抱かせることにもなりました。日本が有色人種のリーダーになったら欧米にとって大きな脅威となる。それは阻止しなければならない、と。そのため日本は、日露戦争後、欧米諸国によって次第に追いつめられていきます。

第1次世界大戦後のパリ講和会議で、日本は新たに発足する国際連盟の規約に「人種平等」の一項を挿入することを提案しました。先に言ったような当時の状況を考えると、これは画期的な提案で

す。欧米諸国の抵抗は極めて強く、同盟国だったイギリスの外務省でさえ「日本がいかにも軍事的に強大になろうとも、白人は日本を対等と認めることはしないだろう」と発言していたのです。結局この提案は否決されました。

こうして日本が先頭に立って進めた人種平等闘争は、アジア・アフリカの有色人種を強く勇気づけました。人種平等が広く認められるようになるには第2次世界大戦の終結を待たなければなりません、そこに至る歴史上の日本の役割を、イギリスの歴史学者アーノルド・トインビーはこう記しました。「日本人が歴史に残した功績の意義は、西洋人以外の人種の面前において、アジアとアフリカを支配してきた西洋人が、過去200年の間にいわれたような不敗の神ではないことを明らかにしたことである」

イラクにおける親日感情や、有色人種の国連事務総長の東郷神社参拝の背景には、こうした歴史認識があるのです。

日本の歴史を最も誤解しているのは日本人である

一日露戦争を戦った明治の日本とは、どのような国だったのでしょか。

明治の人々はなによりも「義」を重んじました。公に奉じる精神です。

そもそも明治維新が成功したのはなぜか。それは武士階級が日本という国のために考えて自ら刀を差し込んだからです。日本人同士で内紛をやっていたら列強に乗っ取られてしまうことを見抜いて、勝海舟が、徳川慶喜が大政を奉還した。サムライの志なくして明治維新はありませんでした。

日本が日露戦争に勝利を取めると、世界の人々は日本の勝因を愛国心・義

務感・自律心などに求めましたが、その基盤は武士道にあると考えました。

1899年に英語で出版された新渡戸稲造の『武士道』は6年間で10版を重ね、独仏語などにも翻訳されました。日露戦争の講和を斡旋したルーズベルト大統領が同書を30冊購入し、息子や政府要人に配ったというのも有名な話です。

この『武士道』で新渡戸が最も強調したのが「義」でした。「義」は人体でいえば骨格に当たり、いくら才能や学問があっても「義」がなければ武士とはいえない、と。

かつての日本人は命をかけてでも「義」すなわち理想や正義を追求しました。現在も諸外国では、自由や民主主義、国家民族の安寧などに生命をかけるのは価値あることと見なされますが、日本人だけは「人命は地球より重い」として、「義」のために命を捧げることを否定し去っています。

国家という存在が希薄になり、「愛国心」が死語になりつつある中で、われわれ平成の日本人は歴史を振り返り、明治のサムライ日本の「義」を再認識しなければなりません。

ビルマ(現ミャンマー)初代首相バー・モーは、「歴史的に見るならば、日本ほどアジアを白人支配から離脱させることに貢献した国はない。しかしまた、その解放を助けたり、あるいは多くの事柄に対して範を示してやったりした諸民族そのものから日本ほど誤解を受けている国はない」と述べています。しかし私はあえて言いたい、「日本の歴史を最も誤解しているのは日本人である」と。

過去の歴史の正しい認識なしに、未来の国家戦略は生まれません。日露戦争100年というのは、地球儀的な視点から歴史を見直し、歴史観を再構築するための絶好の機会なのではないでしょうか。



東郷神社にて